

新春スペシャルインタビュー

稲畑汀子

Teiko Inahata



昨年、俳句の礎を築いたことが評価され「県勢高揚功労」を受賞した俳人 稲畑汀子さん。
ひと月に何万もの選句(寄せられた俳句の中から、優れたものを選ぶ)を行い全国各地の俳句会を飛び回る忙しい毎日を過ごしている稲畑さんに自身の俳句も交えて、いろいろなお話を伺いました。

稲畑さん曰く「俳句とは季題(季節を表す言葉)によって生まれる詩。季題を通して自然を謳い、生活を詠む。日本語を一番快い響きで伝える五・七・五の17文字で表現する。俳句は、日本語を大切にしようと思う気持ちさえあれば、誰でも簡単に作れます。私たちは自然の中で生活し、その中から生まれてくるのが俳句ですから。」

震災に 耐えし 芦屋の 松涼し

1月17日。毎年、多くの皆さんが芦屋公園に訪れ手を合わせる『阪神・淡路大震災慰霊と復興のモニュメント』には俳句が刻まれている。これは震災があった年の夏に稲畑さんが作った俳句。

「その日は寝室で寝ていましたが、突然もの凄く揺れてなかなか収まらない。家の中はメチャクチャになり、外はまだ真っ暗。市内の様子を見に行ったら、あちらこちらで家が倒れ、道路には段差も出来ている。これは大変なことになったと驚き、自然の計り知れない脅威を実感しました。モニュメントの俳句は、芦屋川

ロータリークラブさんから依頼を頂いて作った句。詠んだのは夏、芦屋公園の松は厳然と並んでいるけれど、この松林も震災を耐えたのだと改めて眺めると、感慨深く思いましたね。たくさんの人が亡くなり家屋は倒壊し、街は大変な被害を受けた。でも松並木は地震に耐え、凜と立っている。その松の姿と懸命に復興へと立ち向かう市民の皆さんの姿を重ねて作った句です。震災のあった翌年の成人式に教育委員として参加させてもらいました。二十歳を迎える皆さんがもの凄く立派な姿勢で成人式に参加されていてね。成人式といえば、報道で二十歳のまだ幼い部分を取り上げられるでしょ。でも地震で大変な経験した子供たちは違っていましたね、感心しましたよ。」

日に慣れし 花の明るさ つづきをり

阪急芦屋川駅すぐ南の月若公園内にある高浜虚子三代句碑。この公園付近には、稲畑さんが幼少期に住んでいた父・高浜年尾さんの家があり、祖父・高浜虚子「ホトトギス」のゆかりの地。この碑には親子

3代が作った句が刻まれている。この句は、芦屋川沿いを満開の桜が眩しいほど美しく咲き誇っている風景を謳った俳句。

「俳句で『花』といえば、サクラを表します。他の花なら〇〇の花と表現しなければいけない。この句を作った時の芦屋川の桜は本当に綺麗でしたよ。満開に咲き誇ったサクラがずらりと並び、明るいピンク色の花びらはパーッと目が眩むほどの美しさでしたね。日本でサクラと言えばすぐに散ってしまう儂い象徴でしょ。でも、海外に行けば国によって季節の捉え方も違って面白いですよ。例えば、ロンドンで俳句の講演をした時『桜は咲いてすぐ散るから儂くて美しい』と言ったら『ロンドンでは1カ月くらい咲きますから、儂いとは思いませんよ』って言われ『えっ!』と驚かされましたね(笑)。

咲く花々も、場所によって違うものだと勉強になりました。俳句を通して、いろいろな国に行かせていただき、たくさんの経験を積んできました。それぞれの国で言葉・文化・環境は違っても、変わらない部分での付き合いがある。ですから会話はとても大切。会話の中から俳句は生まれ、俳句を通して人との付き合いが沢山できましたからね。」

稲畑汀子 (いなはた・ていこ)

俳人。1931年生まれ。幼少のころから祖父・高浜虚子と父・年尾のもとで俳句を学ぶ。幼少期に芦屋へ移り住み、1956年24歳で稲畑順三氏と結婚、現在も平田町に住む。1979年日本最大の俳句結社「ホトトギス」主宰継承。2013年主宰を息子・稲畑廣太郎氏に引き継ぎ名誉主催に就任。1992年～1996年芦屋市教育委員・委員長を務める。2000年「虚子記念文学館」を開館し理事長に就任。昨年2月に兵庫県知事感謝状・3月に日本放送協会放送文化賞・5月には県勢高揚功労を受賞。

